予備合宿

涌島恭司

出発前夜，私が調子の悪いペダルをグリスアップして，自転車を輪行袋に入れ終たのは，12時半ごろだったと思う。翌日やけに早起きした。蚊にさされて眠れなかったせいであろう眠くてたまらなかった。重い自転車を担いで電車に乗った。池袋から三峰口まで，早朝の冷気を感じながら，けっこう眠ったみたいだった。三峰口の駅に着くと学我部たちが一足早く来て待っていた。走り出す前に駅前で記念撮影。

川沿いを上流に向って走り始めた。私の自転車はどうも調子悪くチェーンがキく歯飛びした。そのため，急激な力を加えると異様な音が生じるので，まったくリズムが崩れた。川を上り，中津川林道の入口に着いた。これからより狭小な谷へと入るのである。私は，学我部，吉木と共にここを上ったことがあるから，だいたいコースは覚えていた。道が川から離れると道路状態も悪く坂が急になる。私の自転車のチェーンは，歯と割れたらしく歯飛びしなくなった。そういえば渡戸の自転車がディレーラーを巻き込んだのが林道に入る前だった。道路が川を離れる所で一休憩。山口が体の調子を乱したらしく，全員が揃うまで20ぐらい待ったと思う。そこで谷川の冷たい水を飲んだ。谷川の水を飲むのは，久々のことだった。それだけにうまかった。

それまで左右の視界を黒い緑が遮ぎっていたが，川を離れると左手に秩父の山々が，そして雲，空が，容易に見える。この空

間の広がりを感じると気分的にも、根性が湧く。路面は、地道の所は、少なくなり；がれ場みたいな所が多くなった。それゆえ、坂の途中で止まって、また登り始めるとき，じわじわと踏み込まないとスリップしてしまう。険しい登りになってから安井と一緒に走った。しかし、安井には、まいった。42・24の重いギヤでよく登れるものだ。野崎さんと途中一緒になったり、ならなかったり，野崎さんは、ペースを一定にして、あまり休まない人で、ああいう走り方ができるのは、たいしたものだと感じした。"目的地に着くまで、休まないこと立止ってもいけない，したがって歩調はかなりゆっくりと汗の出ないていどに歩りつづけること。"を守た走りが私の理想なのだがなかなかできないものである。

ボトルの水が全部飲み尽くし、峠までのどが乾いてしようがなかった。峠の手前の木材を出すケーブルの所におじさんが一人いたので「峠は近いですか？」と聞いたら，「あそこのガードレールをちょっと行った所だよ。」という返事が返ってきた。霧がかかった山の山頂付近がはっきりと見えなかった。ガードレールがある曲りを曲りきった所に来て先を見るとなにかの隙間からもれる光が霧の中に輝いていた。「峠だ！」と叫んだが声にはならなかった。もうここまで来ると普通の坂は坂と感じず、ややゆるい坂は、逆に「下り坂じゃないかな」と思えてくる。峠の前に坂があった。けっこう急だった。峠に立った。後から来た安井が「やったあ！」と叫んで登ってきた。全員峠に立った満足感をもって，記念撮影，

峠というところは、前に行こうと後に行こうと下りなのである。

下り坂であるが、あまり気分のいい下りではなかった。しかも私の前でパンクして転倒。安井も下りでとばしすぎたせいかパンク（チューブラーでは当然だろう。）。下ってビールで乾杯！と叫んだが大変だったキャンプサイトを捜し回って、結局どこかの橋のたもとに決った。食事の準備にとりかかったのが10時近くだった。快い疲労感が体にあふれ、いちおう手があき、砂利の上に敷いたシートの上に寝ころがったら。背中に感じた不快感もどこかに、消えうせ、いつのまにか眠ってしまった。食事を終え、再び眠った。

朝、起きたのは、9時ごろだったと思う。かなり疲れていたためであろう。麦草に私は行きたかったけれども、出発時間が若干遅れたため、軟弱コースを取ることになった。そのコースは、野部山を通りハッカ丘道路を行くものであった。まったくこの日は、軟弱に尽きた。美しきの森でテントを張った。その夜、花火を十字路のど真中でやって楽しく過した。

次の日のやや下りぎみのアップダウンの続くハッカ丘道路は、安井と1つしょ先を争って走ったひじょうに快快であった。最後の下りは爽快でもあった。小淵沢の駅に着き、帰る準備にかかると麦草へ行けなかったことが残念に思えた。